

OBON 2015

遺留品・記憶をご家族の元へ



誰でも一人一人に家族がいます

初の日章旗返還式

3月23日、OBON2015は、南太平洋のジャングルで日本兵と戦った帰還兵の方を招待し、初の日章旗返還式を開催します。当日は、彼らが戦場から持ち帰った日章旗などの遺留品を、日本にいる本来の持ち主へと返還できるよう、当団体でお預かりする予定です(P. 4 & 5を参照)

目次

- ページ 2: ロン・シャレスト氏
- ページ 3: ニヶ国語のビデオ
- ページ 4: 第41歩兵師団
- ページ 5: 第41歩兵師団
- ページ 6: 調査の一例
- ページ 7: 寄付のお願い・連絡先

ロン・シャレスト氏

OBON2015 は、バージニア州ウッドブリッジ市のロン・シャレスト氏から、寄せ書き入りの日章旗を受け取りました。これは、父、アルマンド・シャレスト氏から受け継いだ戦争の記念品でした。当団体の調査員が日本のご遺族を見つけ、返還することが出来ました。

シャレスト氏は、日章旗の返還に関して、こう話されました。



アルマンド・シャレスト氏
(第二次大戦当時)

「この日章旗の大切さを説明頂いた瞬間から、これは遺族に返すべきだと確信しました。私も兵役の経験がありますが、もし米軍に同じような習慣があったら、私の寄せ書きも同様に扱われることを希望します。」



アルマンド・シャレスト氏
(退役後)

当団体の調査員により、元兵士の弟と妻が広島近郊にいらっしゃることが判明しました。彼らの希望を確認の上、日章旗を返還いたしました。

「日章旗が無事、本来の持ち主に届いたと聞いて、肩の荷が下りました。あの世で、父も安堵しているに違いありません。この日章旗を、本来の持ち主へ返還することにご尽力いただいたOBON2015のスタッフに、深く感謝いたします。」



広島県の位置

二ヶ国語のビデオ

昨年秋、カリフォルニア州ロスガトス高校の生徒から、当団体に連絡がありました。彼は、高校の自由課題として、先生の持っている日章旗を日本へ返すことに取り組んでいました。



OBON2015の専門スタッフが調べたところ、残念ながら、この日章旗は偽物だと判明しました。戦後、占領軍兵士へのお土産として売られていた模造品かもしれません。(詳細は、p.6「調査の一例」を参照)

この学生、笹川真行さんは調査結果に失望しましたが、諦めませんでした。情熱と創造性にあふれる笹川さんは、代わりに、米国各地の若者に「寄せ書き日の丸」の物語を訴え、その返還活動を知ってもらおうと決めました。

笹川さんはビデオを作製することにします。台本を作成し、アン・ジョーダン先生の助けを借りながら、作業を開始しました。地元の公共スタジオ・スペースを借り、友人にカメラを回してもらい、撮影が始まりました。

このビデオには、彼のメッセージを伝えること、日本語学習者のための教材となること、という二つの目的があります。このユニークなビデオは、こちらからご覧いただけます。

https://www.youtube.com/watch?v=SOqEP_Ju2uA または YouTube で「Flags of our Ancestors」と検索して下さい。



笹川さんはカリフォルニア生まれですが、彼の両親は日本生まれです。二つの視点から、日章旗について、流暢な日本語と英語で、交互に説明します。

第 41 歩兵師団

第 41 歩兵師団は、第二次世界大戦中、最も長期にわたり活動していた部隊です。

第 41 歩兵師団 は、アメリカ北西部を担当し、主に、オレゴン、ワシントン、アイダホ、モンタナ、ノースダコタ州出身者で構成されていました。部隊の起源は 1917 年まで遡り、第一次世界大戦への参戦を経て、1921 年に、州兵隊となりました。

1940 年 7 月初旬、師団は、更なる強化訓練を受けました。1941 年には、約 18000 名からなる大部隊となり、ワシントン州フォートルイス市で訓練を続けました。



第 41 歩兵師団は、太陽を沈める部隊(“Sunsetters”)として知られました。所属する隊員は、輝く太陽が沈むワッペンを肩にしていました。

真真珠湾攻撃後、第 41 歩兵師団は、南太平洋で実戦配備されました。1942 年 4 月から数ヶ月かけて、すべての部隊がメルボルンに集結しました。彼らは、海岸沿いでの 100 マイル軍事行進等の戦闘訓練を受けました。この時は、日本兵との戦闘は簡単に終わるだろうし、すぐに故郷へ帰れると、兵士達は教えられました。



第 41 歩兵師団が、海底の砂に足を取られながらも、揚陸艇から、上陸しているところ

12 月には、ニューギニアへ向かい、1943 年 1 月には、日米間で最初の地上戦の一つである、ブナ・ゴナ戦へと参加します。この時、初めて隊員達は、頑強で、決死の覚悟で迫り来る日本兵の恐ろしさを思い知ります。同時に、南洋のジャングルは疫病など、米国本土では思いもよらない危険に満ち溢れていることを知ります。

第41歩兵師団



左：二週間に渡るジャングルでの死闘を終え、終結した部隊兵達



右：戦闘の合間に、戦利品を誇らしげにかざす兵士



硬い珊瑚質の土地に作られた塹壕から顔を出す兵士達

第41歩兵師団はサラマウア、ホーランドディア、アイタペ、ウェーク島、ビアクなど、ニューギニア周辺の数多くの戦いに参加しました。その後、フィリピンへ移動し、パラワンとサンボアングの戦いに参加しました。終戦後は、占領軍として広島に駐留しました。

戦後70年経ち、日本に対する彼らの感情は変わりました。今日、ほとんどの元隊員達は、日本への憎しみや不信を持っていません。

ある日、当団体の活動が師団本部の知るところとなりました。さっそく、師団のニュースレターで紹介していただくと、元隊員達から、数枚の「寄せ書き日の丸」が送られてきました。皆、日本にいる本来の持ち主の元へ返還することを希望していました。

3月23日、第41歩兵師団の元隊員達は、オレゴン州アストリア市で再会します。その時に、遺留品は、OBON2015によって正式に引き継がれる予定です。これは、米国の帰還兵が、遺留品を日本へ返す最初の正式な式典です。



左：元第41部隊所属、レスリー・ウェセリム氏（通称“バック”）。本当の持ち主の元へ帰れるよう、日章旗を当団体まで送ってくださいました。



右：当団体は、兵士の兄を見つけました。代理として、その甥に日章旗を返還させていただきました。

右下：日章旗の持ち主、米山重幸氏は、山梨県出身でした。1945年3月13日、フィリピンのサンボアングで戦死されました。



調査の一例

ロスガトス高校の教師が持っていた「寄せ書き日の丸」は、一見、本物のように見えます。しかし、当団体の調査員によって、疑わしい箇所が数点見つかり、1940年代当時のものではないと判明しました。

一部の日章旗には、神社での捺印が見受けられます。しかし、この日章旗は、普通の判子を繰り返し捺印しています。明らかに、お土産客を騙す手口です。

「大和撫子 信子」と書かれています。これは、「美しい日本婦人、信子」という意味です。日章旗上で、このように自分自身を称える記述を、我々の調査員は見たことがありません。寄せ書き日の丸とは、常に、出征する兵士に対して、無事を祈るメッセージを書くものです。

この新字体の「国」という文字は、戦後使われるようになりました。1940年代には、旧字体の「國」だったはずですが。この日章旗が偽物であると断定する決め手となりました。

戦時スローガン「一億一心」が右向きに書かれています。このように文字が書かれるようになったのは、戦後になってからです。

当団体の調査員は、この部分の筆跡がすべて同じであると判断しました。寄せ書き日の丸とは、複数の人が、時間をかけて、署名やメッセージを記します。多くの場合、寄せ書きは数回に分けて行われ、通常、異なる筆が使われます。

寄付のお願い・連絡先

当団体は、皆様からの寄付により活動しています。

宛先

アメリカ在住の方（501(C)3を通じた税金控除の対象となります）

AVA/OBON 2015
P.O. Box 282
Astoria, Oregon 97103

日本在住の方

＜ゆうちょ銀行からの振込＞

記号：14450 番号：16577781
名前：オボンニセンジュウゴ

＜他金融機関からの振込＞

振込先銀行名：ゆうちょ銀行
店名：四四八（読み ヨンヨンハチ） 店番：448
口座番号：1657778
口座名：オボンニセンジュウゴ

（「オボン2015」は、2015年の日章旗返還を目指した、当団体の前身名です）



皆様から頂いた寄付金により、より多くの遺品を返還することが可能になります。

日章旗をお持ちの方、また、所有されている方をご存知の場合は、当団体までご連絡ください。日章旗・その返還方法に関して、ご質問があれば、ご遠慮なくお尋ね下さい。我々は日章旗の返還に、使命と情熱をもって、取り組んでまいります。

OBON Society
P.O. Box 282
Astoria, Oregon 97103
contact@OBON2015.com